




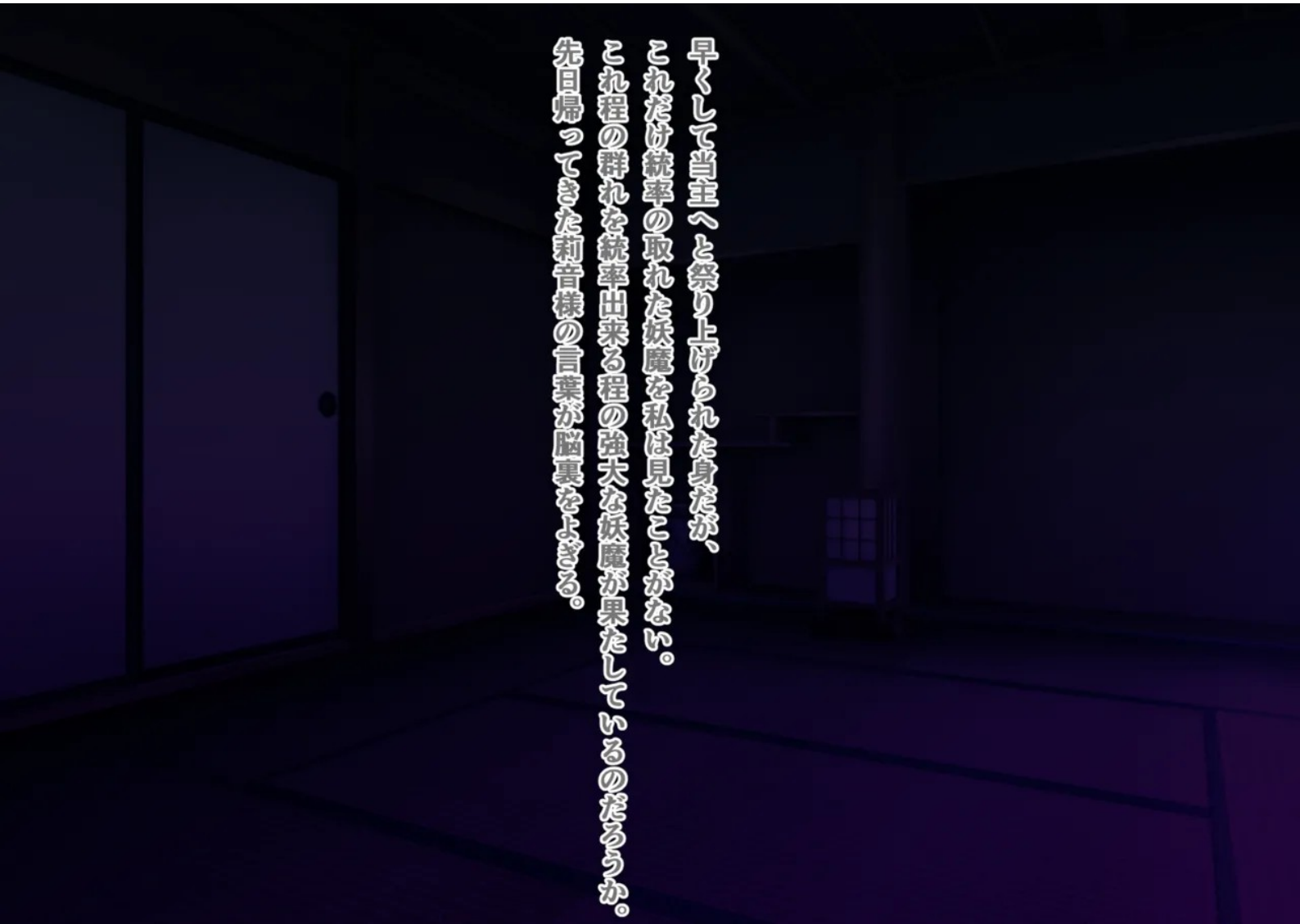
「なんで里に妖魔が!? 結界はどうしたんだ!」
「もうどこまで妖魔が来てるぞ! 警護班はどうしたんだ!」
「助けて! 死にたくない!」



それは前触れもなく突然訪れた。
里を方位するように突如現れた妖魔の群れ。
なぜか結界は機能せず、自体を把握する間もなく
夜の里は地獄絵図に変わった。

「お主人様、裏側が駄目でした。田舎でいそいそと
「なつかしいお主人様かたじけなく逃げ〜たわさ〜」





早くして当主へと祭り上げられた身だが、
これだけ統率の取れた妖魔を私は見たことがない。
これ程の群れを統率出来る程の強大な妖魔が果たしているのだろうか。
先日帰ってきた莉音様の言葉が脳裏をよぎる。



「妖魔王はもう脅威ではありません」



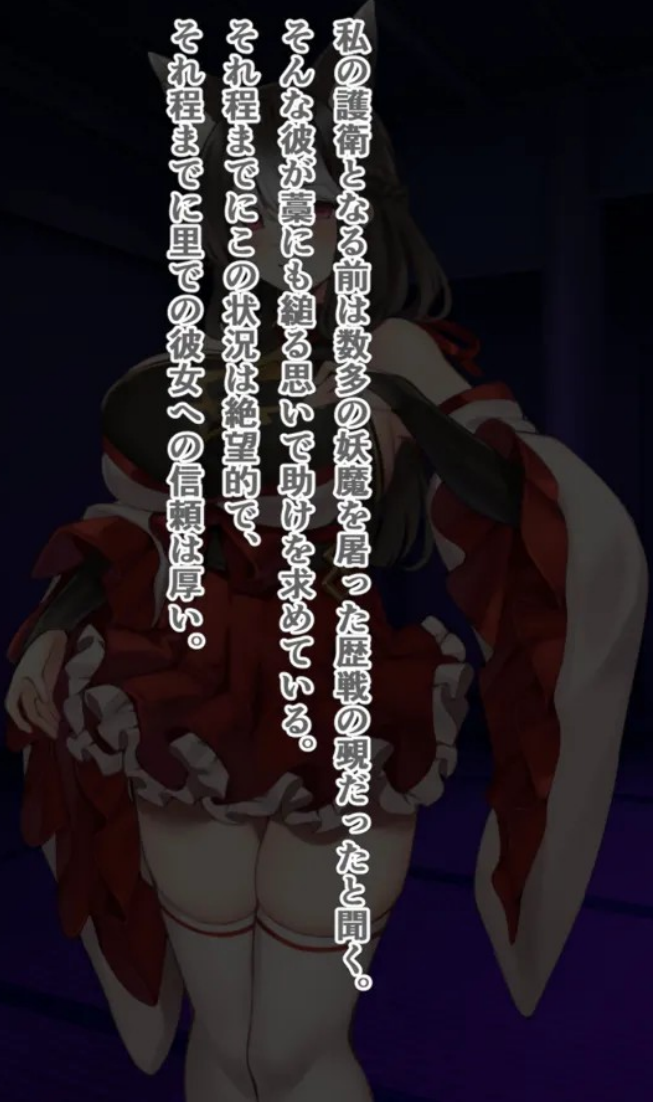
「一際邪悪な気配がこちらに向かっ
てきていきます！
私達ではお守り出来ません！」
「そうだ、莉音様！ 莉音様はどこに！？」
妖魔主を倒したあの方なら！」

「呼びましたか？ご当主様」

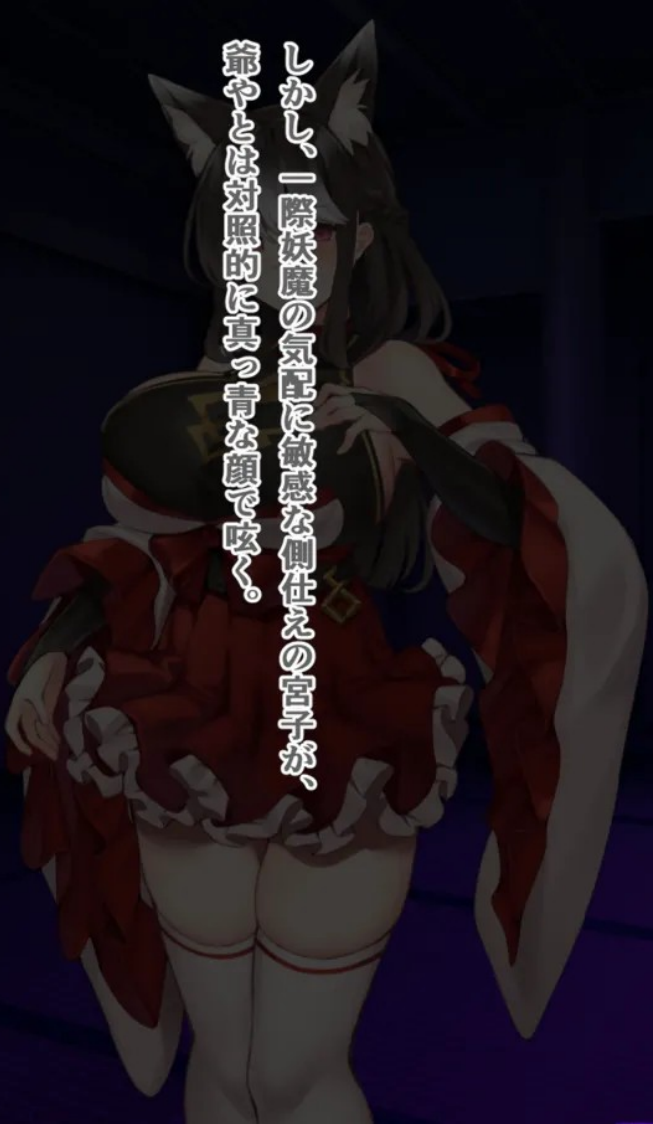


「莉音様！助かった！なんとかかご当主だけでも逃がしてくれ！
いや、貴方ならこの妖魔の群れなんとか出来ませんか？」





私の護衛となる前は数多の妖魔を屠った歴戦の現だったと聞く。
そんな彼が裏にも纏る思いで助けを求めている。
それ程までにこの状況は絶望的で、
それ程までに里での彼女への信頼は厚い。



しかし、一際妖魔の気配に敏感な側仕えの宮子が、
爺やとは対照的に真っ青な顔で咳く。

「ま、待ってください……なんで……
なんで、莉音様から妖魔の気配が……」





「……何を言ってるんだ宮子?」
「お主の言うとおりのだよ宮子! 妖魔に囲まれてるんだぞ!
ぶちかめた事を言うな!」刻を争うんだぞ!」

「いえ、間違ってますせん！下がってくださいら！
彼女から妖魔の気配、それもとてつても邪悪なものを感ずます！」





「……流石ですね。これでも結構隠したつもりなんです。側仕えだと甘く見ていました。もう出てきてららですよヒトネ」
「だからそんな回りくどい事しなくていいって言ったのだ。姉様は物好きなんだから」

「助かったと一瞬思わせた方が絶望に落とした時にいい
悲鳴を上げてくれるでしょう？こっちは楽しまないと。
でもバレてしまったのならこんな格好してる必要ありませんね」



「なんだその姿は……？」

「なんでも何もこれは私の真の姿です。

妖魔王様の傀儡奴隷、妖魔レイネそれが今の私です」

「同じく、妖魔王様の愛玩低級妖魔コトネ。

この里は妖魔王様の供物になるの。いひひっ」





「折角です。最後の時、存分に楽しみましょう？ご当主様♡」



「やめてください莉音様！ 正気に戻ってくださいー！」
「皆同じ事を言うのですね。私からすれば魔王様に歯向かう事の方が
よほど正気ではならと思うのですが」



「まだ間に合います。里を、お救ぐたいわら……。」
「この期に及んで自分の事より里の未来を憂うてくれるんですね。
なんて健気なんでしょう。」



「でも、もう手遅れです。里の民は一人残らず妖魔王様の贄となるのです。
なんと光栄な事なのでしょう。さあ、貴方も力を抜いて……♡」
「ぐああああっ」



「凄いでしよう？ 妖魔王様に作り変えて頂いた極上の蜜壺は、
残念ながら私は人間如きでは感じる事は出来ませんが、
ご当主様の悲鳴はぞくぞくします。
さあ、もっといい声で鳴らしてください」



「やめるんだ琴音、君はこんな事をするやつじゃ」
「いひひっ、そんな事言っつて妻い勃起してるじゃん。
いっばい気持ちよくしてあげる。ほら、あつちでも始まるよ」



「気持ちいいでしょう。妖魔の触手ちゃんば。
妖魔王様のはもっと凄いんだから。
死んじゃうかもって思うぐらいグチャグチャにしてくれるの。
ああ、考えただけで濡れてきちゃった。
でも今はお仕事中だから、貴方で我慢してあげる」



「待て、やめろー！私には家内が……んっ♡」
「大丈夫、奥さんも今頃触手と楽しんでるよ。
……っ、もう出ちゃったの？挿れたはっかりだよっ」



「ぐちゃっ♡やめて〜ただなら利音様……んれ以上は……」
「あら、もうへばったのですか？ やっぱり人間は脆いですね。
でも、私は全然満足出来てないんです。お楽しみはこれからですよ」



「姉様の言う通りだよ。帰って妖魔王様に使って頂くに当たって、
こんなんじや前菜にだってならないよ。私達妖魔の本気を見せてあげる♡」
「……これは、淫気……ぐ、あああああああ」

ぐわっ



「どうですか？そこらへんの妖魔の薄い淫気とは桁違いでしょう？
 ほら、正気を手放して……♡理性だって要りません。
 獣のように、まぐわらまじょう〜」
 「あ、あああああががが」

♡ちゅ♡
♡♡♡

♡ちゅ♡
♡♡♡

♡ちゅ♡
♡♡♡

♡ちゅ♡
♡♡♡

♡ちゅ♡
♡♡♡

♡ちゅ♡
♡♡♡

♡ちゅ♡
♡♡♡



「頭が、おかしくなる……やめろ、とめろ……」
「止めたーい♡姉様程じゃなけれど、私のもってなかななかでしょう？
ほら、見違えるぐらい元気になった♡」



「はぁ、んひっ、気持ちよくなりたくなのどっ♡
こんなの、せりっ♡もっ♡も♡」
「間接的とはいえ、私達の淫気を吸っておかしくならないなんて、
宮子は素質がありますね。御主人様らしい土産が出来ました」



「ア、ガガ、タスケ……」
「まだ自我があるんですか？ほら、無理をしなさい。
精子と一緒に全部出してしまえよ！ほら、びゅーっ♡」



「イクン、いびひ、出るの？出せっ！人間のクソ弱劣等精子、イキますっ♡♡」
「いびひ、出るの？出せっ！人間のクソ弱劣等精子、命反するまで搾り取ってあげるっ」

いびひ♡♡

いびひ♡♡

いびひ♡♡

いびひ♡♡

いびひ♡♡

いびひ♡♡

いびひ♡♡

いびひ♡♡

「姉様ったら、まだ食い足りないだけですよね」
「ヨトネもでしょうっさあ、新しい獲物を探しましょうっ」
「全ては妖魔様のために」











































































